

令和7年度第1回さいたま市子ども読書活動推進会議 会議録

開催日時 令和7年5月30日（金） 午後1時30分～午後4時30分

開催場所 中央図書館イベントルーム

出席者 【委員】

汐崎順子委員、富田敏弘委員、橋本義委員、三宅京子委員、中村涼子委員、
細野美和委員、飯島亮子委員、佐野公子委員、松村愛委員、小林愛美委員、
内野明日香委員

【事務局】

（中央図書館）阿部晴光、大橋義武、岡田雅彦、寺井総子、佐藤久美、大塚瑞穂、
加倉井理恵佳

（武蔵浦和図書館）村山早苗

（北浦和図書館）富田淳

欠席者 なし

公開・非公開の別 公開

傍聴人の数 0名

次第

令和7年度 第1回 さいたま市子ども読書活動推進会議

開催日時 令和7年5月30日（金）

13時30分～16時30分

開催場所 中央図書館 イベントルーム

1 開 会

2 委嘱状交付

3 あいさつ

4 座長・副座長の選出

5 議 事

（1）さいたま市子ども読書活動推進計画について

（2）さいたま市子ども読書活動推進計画（第五次）の策定について

（3）子どもの読書活動推進について（意見交換）

6 閉 会

1 開会

2 委嘱状交付

3 挨拶

- ・各委員自己紹介
- ・事務局職員自己紹介
- ・館長挨拶

4 座長・副座長の選出

5 議事

【議事内容】

(1) さいたま市子ども読書活動推進計画について

座長 議事（１）について、事務局より説明をお願いします。

事務局 さいたま市子ども読書活動推進計画についてご説明いたします。

平成１３年に施行された「子どもの読書活動の推進に関する法律」に基づき、さいたま市では、平成１８年に「さいたま市子ども読書活動推進計画」を策定しました。その後、平成２３年、平成２８年と５年ごとに改定を行い、「楽しむ読書・みんなで読書・支える読書」という基本方針を引き継ぎながら、時代の変化を踏まえて、内容の見直しを図ってまいりました。

主な取組の成果としまして、全市立小・中学校、高校、特別支援学校への学校図書館司書の配置、及び図書館データの一元管理を実現し、蔵書の共同利用を推進しました。図書館では、年齢別の定番児童書リストや読み聞かせに向くブックリストの発行を行い、これらの刊行物は、現在も多く家庭、学校、施設等で活用されています。

お手元の計画冊子をご覧ください。令和３年に策定した、「さいたま市子ども読書活動推進計画（第四次）」では、「創造力や感性の豊かな子どもをはぐくむため「読書が好き」な子どもを増やす」ことを新たな目標として掲げ、取組を進めております。この第四次計画では、子どもの読書活動について、市民の関心と理解を深め、子どもの読書意欲を高めるため、家庭、保育所・幼稚園、地域、学校と連携を図りながら読書活動の普及啓発を行ってまいりました。

大きな取組としましては、毎月２３日をさいたま市子ども読書の日

と定め、関係各所一体となって普及啓発を行っていること、優れた取組を行った施設や団体を表彰する「さいたま市子ども読書活動優秀実践表彰」制度を創設し、令和4年度から毎年表彰を実施し、取組の奨励を行っていることなどが挙げられます。また、学校との連携として、ビブリオバトル等読書に親しむイベントの拡充のため、学校向け「ビブリオバトル実践ハンドブック」「すぐできるキット」を作成しました。HPに掲載し、ダウンロードして利用可能なため、市外からも数多く問い合わせをいただいております。今年度の図書館主催のビブリオバトルは、規模を拡大して実施する予定です。

第四次計画の取組詳細や、その成果と課題につきましては、今後、素案にまとめ、第2回の推進会議で報告させていただきます。

お手元に各種刊行物を配付いたしました。ぜひ、ご覧ください。

座長

ありがとうございました。今の説明に関して、質問等がありますでしょうか。

では、私から発言させていただきます。私は「さいたま市子ども読書活動推進計画（第四次）」策定時にも関わっていました。子どもの読書活動推進に対して、さいたま市は非常に一生懸命取り組んでいると思います。第四次計画を策定する時に、コロナの影響がこれだけ大きくなるとは誰も想像し得なかったことだと思います。学校が休校となり、図書館にも行けず、家庭に本があればまだいいですが、子どもたちが読書に関わるができない状況になってしまいました。また、GIGAスクール構想で子どもたちがタブレット端末で学ぶということが当たり前になってしまった中、今回はこの成果を踏まえて、新たに視野を広げて考えていかなければならないと思います。

私事ですが、『子どもの読書を考える事典』を仲間とともに出版しました。紙の本を、子どもに对面で伝えたい。なぜ子どもに読書が大事なのか？そこから考え直して作りました。結論としては、特に小さい子どもには紙の本で五感を使って読書体験をしてもらいたいという気持ちがあります。ただ、コロナ禍では本と子どもをつないでくれたのはデジタルの環境でした。第五次計画では、何が子どもの読書を豊かにするのかを考えた上での計画になって欲しいです。

委員

座長と同じことを思っていて、「読書」って「推進すること」が前提になっていて、そもそもなぜ推進しないといけないのかと思っていました。なぜ読書が大切なのかを考え直すことはとても大切だと思います。

した。

今回、事典を作成されて、どのような結論になりましたか？

座長 なんでもとにかく読めばいいというわけではない。読者により良い物語や経験値を伝えてくれて、それが心を動かし、彼らの物語を紡ぐものになってもらうのが私たちにとっての一番根源的な読書の形ではないかと思います。そこで初めて紙か電子かということに結びついていくのではないかと考えます。

委員 学力以前に人間性をどう育むかということですかね。

座長 そうですね。読書をするのは学力が第一の目的ではない。一人ひとりの個性を大事にしながら、自分たちが楽しいと思って読めることが大事だと思っています。

委員 子どもの対象は何歳から何歳までを指しているのですか？

事務局 0歳から18歳までを計画の対象としています。

座長 「子どもの読書活動の推進に関する法律」という国の法律があり、各自治体ではその法律に基づいて計画を立てていますが、そこでは対象を0歳から18歳としています。また、図書館の児童サービスも0歳から18歳をサービス対象としています。

委員 幼稚園・小学校くらいまでは保護者や周りの人が関わってきますが、中学校以上は自分の意思で判断するようになってくるかと思うのですが。

座長 不読率というものがあって、それは1か月間に1冊も本を読まないということですが、中学生・高校生は顕著に不読率が高いという結果がでています。学年が上がるにつれて読まなくなるということになります。

委員 全国平均の中学生の不読率が低いなと思いました。約85パーセントの中学生が1か月間で1冊本を読んでいるということになるのですが、信じられません。

事務局 さいたま市の学校では朝読書を実施しています。

委員 強制的な読書もカウントしているわけですね。

事務局 能動的に読んでもらえるように学校でも働きかけを行っています。
それを含めての子ども読書活動推進となっています。

座長 どこで計るかで不読率も変わってきます。例えば、全国学校図書館協議会が実施している学校読書調査では、5月の1か月間に読んだ本の冊数を調べています。また、東京大学とベネッセの共同調査は7年間の追跡調査で見ているものですが、2023年に50パーセントが日常的に本を読まないと公表しています。枠組みによって、数字は変わってきます。

 朝読という時間を作って読書をする 것도 本を読んだこと になります。ただ、それが楽しく能動的に読書をしているかと言われると疑問ではあります。

委員 目標としては「本好きを増やす」ということですから、本当にそれでいいのか疑問です。

事務局 第三次計画までは不読率の数値を目標に掲げていました。しかし、第四次計画を策定する際は、不読率よりも「本が好き」と思ってもらえる子を増やすほうがさいたま市の計画の考えに合っているだろうということで第四次計画では目標を修正しました。

委員 良い修正だと思います。

事務局 ありがとうございます。

座長 学校現場ではいかがでしょうか？

委員 学校現場では「量か質か」というよりは「出会う」を大事にしていきたいと思っています。時間割の中で1時間図書室を使えるクラスが決まっていて、その時間は優先的にそのクラスが図書室を使えます。

 量の話で言えば、音読カードの右側に読んだ本を書いて自分の足跡

として残せるようにしています。地域の図書ボランティアが子どもに読み聞かせをしてくれます。学校としては環境整備に努めていますし、身近に感じてもらえるような工夫や本に触れる時間を確保できるようにしています。

座長

今、学校のカリキュラムはとても厳しくなっていて、子どもたちの図書の時間をとることが難しくなっていると思いますが、努力されている学校もあるということですね。

委員

確かに高学年は厳しいところですが、低学年・中学年はゆとりがあるので、子どものほうから図書室に行かないの？という催促をされます。

委員

今年に入ってから、指導訪問で学校を回っています。変わってきたと感じるのは、カリキュラムに関するところで、自由読書の時間が確保されている学校もあるという話がありましたが、もちろん時間割の中に位置づけている学校がほとんどです。ただ、使い方が変化しているように感じます。さいたま市では、カリキュラムマネジメントがキーワードになっています。自由読書の時間をもちろん取りますが、各教科とのつながりを考えたときに、その時間をどうやって図書館で過ごすか、どんな本と出会う機会にするかを教科の学びとつなげた形で使い方を工夫している学校も出てきたと感じています。子どもたちの多様性についての対応を学校現場は非常に頑張っています。本の「好き」「嫌い」や、「読むこと」自体が難しい子もいて、読み聞かせが効果的な子もいれば、大人が読むような本を読みたい子もいる。一つの教室の中にいろいろな子どもたちがいるので、どのように学校図書館や学校での読書活動を行っていけばいいのか考えています。

そういう意味では、まずは「機会」。家に帰ると図書館とは縁遠い子どもたちもたくさんいます。そこで週1回でも図書館に行ける、という機会。朝読も強制的と感じるかもしれませんが、読書の場を用意する、と捉えています。どう読むかは子どもたちに委ねながら、学校現場としては個に応じた読書を提供できるような環境を、公共図書館とシームレスにできればいいなと考えています。読書貯金も学校で読んでいる本だけで積んでいるのではないと思っていて、放課後の時間の読書と学校の読書がドッキングして子どもたちの励みになればいいなと考えています。

委員 ボランティアとしての取組を紹介します。私たちのグループでは、緑陰読書会の活動をしています。子どもたちの中には初めて自分で本を選ぶ経験をする子もあり、わくわくした表情で本を選んでいきます。年1回、市立のいずれかの学校で行っていました。カリキュラムで時間が取れないせいか、実施が難しい学校もありますが、子どもたちは、学校図書館以外の本に出会うことができ喜んでいきます。

座長 ありがとうございました。

 旧浦和市は学校図書館支援センターがあつて、図書館と学校連携協力が初期のころからシステマティックにされていて、今の様々な活動もそこを土台にさらに進んでいるのかなと感じています。学校での取組の様子などはいかがでしょう？

委員 本校の図書委員が作っている「図書館報」の中で、図書委員が生徒を対象に読書アンケートを行っています。

 毎年質問項目は変わります。去年の質問項目は、「自分が一番読書家だった時期は？」というものがあつて、「小学生、中学生の頃」という回答が多かったです。

座長 その質問は生徒が考えたのですか？

委員 はい、生徒が考えました。

 中学生の頃までは本をすごく読んでいた子が、高校生になると忙しくて本を読む時間がないという場合が多いです。どんなに本が好きな子でも高校3年生になると、図書館通いをやめてしまいます。でも、受験が終わると、今までの鬱憤を晴らすように、毎日のように図書館に来ます。高校1・2年生の時によく通っていた子はもちろん、あまり図書館に来ることのなかった子が卒業直前によく借りに来るという現象も毎年起こっています。すぐに反応が見えないことがあっても、何か月か経ってから、以前の図書館便りに載っていたあの本ありますかとか、前に展示されていた本でこんな感じの本ありますかといった問い合わせを生徒から受けます。

 生徒は、特定の時期に本を読まないことはありますが、どこかのタイミングで本に戻ってくると感じています。

座長 おそらく、そういう子どもは小学校・中学校時代に楽しい読書経験が

あって、1回は離れたけれどもまた戻ってくるということなのかなあという気はします。

委員

私は、赤ちゃん向けに読み聞かせやわらべ歌をするのですが、赤ちゃんには、大型（大型絵本）は必要ないと思っています。大型でイベントのようにやっていると、普通サイズの絵本に感激できなくなってしまう、読書経験に繋がらないと感じます。

小さい頃からできれば、膝に乗せて、普通サイズの絵本を1対1で読み聞かせするというのがベストです。

次から次へ新しい本を与えるのではなく、好きな本を何回も読んであげる。最後は必ずこの本というものがある子は、心の安定が全く違います。

それから、中学生に朝読書用の電子書籍を入れて欲しいです。電子書籍で読めれば、朝読でもとても活用できるかなと思います。

性教育の本も電子書籍で読めると、とても有効だと思います。さいたま市の電子書籍をもっと利用してもいいのではないかなと思います。そして紙にまた戻る子もたくさんいると思うので、ぜひ、使えるものは何でも使っていただきたいと私は思います。

座長

先ほど、「対象は0歳から18歳までですか」という質問がありましたが、事典を作るときの仲間と出た話題ですが、小さい頃に原体験として、きちんと読んでもらって、きちんと手渡すという経験があった子たちが、電子書籍であれ紙あれ、自分たちが必要とする情報を選択できればいいと思っています。だから電子書籍を否定はしていなくて、委員がおっしゃったように、まず素地としてきちんと人が紙の本を手渡して、彼らが、成長してこれまでの読書経験を元に自分なりの読書を選択できるようになった時に、メディアが多様になっているといいねという話をしていたのを思い出しました。

家庭での読書がとても大事だということになると、まずブックスタートですね。本を通して親子でコミュニケーションというところも大事で、家庭での読書を推進して、全国的な傾向としてブックスタートをやっていますが、さいたま市のブックスタートについて、ご意見をいただければと思います。

委員

その前に質問があります。

先ほど大型とおっしゃっていたのは、大型絵本を指しているのです

か？大型絵本はあまりよくないということでしょうか。

委員 時にはいいのですが、いつも大型絵本を使っていると、普通サイズの絵本では物足りなくなってしまう。教室ぐらいでしたら通常サイズの絵本を使いたいです。

委員 大体何人ぐらいから大型絵本のイメージでしょうか。

委員 私のイメージでは50人から100人です。
紙芝居は大人数向きに作られていますけど、絵本はあくまで1対1で読むことを前提に作られています。
あと学校の先生にお願いしたいのですが、小学校2年生の後半になっても子どもたちには絵本をたっぷり楽しんで欲しいです。受験で有名な私立小学校では、1・2年生が借りる本は絵本に限っていると聞きました。そうしないと家庭でも子どもに文字だけの本を渡すようになってしまい、3・4年生でつまずいて、文字だけの本を読むことに繋がらなくなってしまいます。
たっぷり絵本を読んであげることが、大切だと私は思っています。

座長 ありがとうございます。

委員 さいたま市は各学校に学校図書館司書さんがいるので、子どもがいつでも本を借りられるということはとてもありがたい環境だなと思います。
展示物も、ボランティアさんの協力も得て、いろいろとしてくださってとっても明るく、どの学校に行ってもそれぞれの司書さんが工夫してやってくださっているので、ぜひ、続けていただきたいです。毎日司書さんがいれば、子どもたちがもっと本を借りられますし、ゆくゆくは学校図書館司書を正職員にして欲しいと私は思います。

座長 では、ブックスタートについて話を戻します。

委員 ブックスタート事業で1歳未満のお子さんに絵本をプレゼントしています。プレゼントして終わりではなくて、支援センターにお越しいただき、家庭での読み聞かせ絵本選びについて、支援センターの職員で支えていけたらなと思っています。

座長 ファーストブック、セカンドブックのような形で、次の読書にステップアップしていけるような道筋を、用意すべきだと思うのですが、やはり最初は原体験として絵本を読んで、本の中身よりもお母さんと一緒に楽しめたなどの経験を持つことも大事なかなと思っています。

委員 うらわ美術館に、しかけ絵本のコーナーがあるのですが、そこへ子どもを連れていったところ、閉館までそのコーナーから離れなくてびっくりしました。子どもがあれだけ夢中になるってすごく貴重ですね。うらわ美術館のそのコーナーを皆さんにも知って欲しいなと思います。あと、うちの子は、「コロコロコミック」が好きで、毎月買っています。

 その中の「星のカービィ」という漫画が好きで、これは子ども向けの文庫本も出ています。本であれば、僕は漫画でも雑誌でも何でもよいと考えていて、そこから活字だけの本も読むし、ゲームで言えば、ゲームの攻略本を買ってビジュアルで攻略を学ぶこともあるので、何からでもいいから、本と繋がる機会が増えればいいと思っています。

 ただ、基本は、学校の図書室です。

 家庭では何でもいいから、読書に繋がるものを渡すし、学校では図書室に子どもが行ける環境を作ってもらえばありがたい。

座長 この計画自体が家庭であり地域であり、子どもの読書の機会をみんなと一緒に作っていきましょうという話なので、委員がおっしゃったように、場の広がりとかメディアの広がりの中で、子どもたちの多様な選択肢や多様な場所があって、うらわ美術館もまた 1 つの場であるということはずごく感じました。

委員 うらわ美術館は、テーマが「本をめぐるアート」いうことになっていて、それにちなんだものを常設で展示していたり、時々、企画展などで絵本に関するものを取り組んでいたります。

 それから、学校からの要望に応じて、しかけ絵本を持って指導主事が学校に行って、しかけ絵本をこんなふうに見せながら、すてきな世界を子どもたちが堪能できるようにというふうな取り組みをされていて、まさに多様な本との出会いというところで、機会を提供しています。

委員 幼稚園には来ていますか。

委員 幼稚園からの要望があるのかどうか、私は今把握できていませんが、

小学校からは要望があつて、小学校には来ています。

委員 そういった事業を行っていることを知らない要望を出すこともできません。広報のところも課題ではないかなと思います。

座長 一読者として、あるいは一市民として何かありましたらお願いします。

委員 読書の対象の本は、何を指して読書って言っているのでしょうか。
出版社に勤めている人間から見ると、児童書の売れ線って何万部突破という本が児童書コーナーにあるイメージがあります。何歳の子でどういう本を、ということを考えながら、多少、共通認識を持って話した方が議論を進めやすいのかなと感じました。

座長 そうですね。私自身は「読書」というと、どうしてもノンフィクションではなくフィクション系のイメージを持ててしまいます。
私は、大人に子ども時代の読書体験を聞くことがあるのですが、ある方は子どもの時によく読んだ福音館書店の『冒険図鑑』が東日本大震災の時に役立ったと言っていました。子どもの頃に覚えるまで読んだそうです。そして、大人になって東日本大震災で被災地支援に行った時、トイレの作り方がその本に載っていたことを思い出して、トイレを作ったそうです。それも彼にとってすごくのめり込んだ読書体験だったのだろうと改めて感じておりました。「読書」っていうと読み聞かせとか物語というところには、視点がいてしまいますが、もっと広い意味での読書メディアというものも考えなければということですね。ありがとうございます。

委員 図鑑も入ると思っています。好きな子はなめるように読んでいますから。

委員 「読書」の定義ってないってことですね。
先ほど言われた、漫画だったり、図鑑だったりを読むということは、それも「読書」に入るのでしょうか。推進する「読書」というものは何を指しているのでしょうか。

事務局 本を読むことそのものを、広義の意味でとらえて、活字に触れる、或

いは絵本であれば、字のない絵本っていうものもありますから、そういったものから想像力を働かせて物語を読み取る。

心を動かされるような体験、そういったものも読書活動に含まれていると思います。

市の計画の中では、どうしても指標というものを掲げて子どもたちの読書状況を調査する必要がありますので、調査の上では漫画、雑誌を除きますというような形をとっています。

委員 新聞やネットニュースも「読書」ですか？

事務局 新聞もちろん、活字に触れるという意味では「読書」ととらえています。

ネットニュースで何かを知るために読むということも「読書」ととらえていいと思います。

委員 それなら、私も読んでいるかもしれません。

座長 「読書」についての考えかたは人それぞれで、一定ではないと感じています。

委員 1996 年ぐらいに入社しましたが、アナログからデジタルへ移行する時期でした。

知識やナレッジの共有を、電子と紙をシームレスにどうやってしていくかということをお客様にコンサルティングしたりソリューションしたりするOAメーカーで仕事をやってきました。

自分も昭和に生まれ昭和の親に育てられているので、やはり書籍が好きですし、紙媒体に思いはとてもあります。30 年近く企業の中で仕事をしていると、知識やナレッジの理解に関しては、スピードがすごく必要で、そういう点では文字を読んできた人たちが、圧倒的に理解が早いと感じました。活字に多く触れてきた人は、仕事の上でも、言葉選びが上手い。

適切な関連語をいかに入れられるかで、適切な情報をヒットできる度合いもスピードもぐんと変わります。

そのために読書をしたほうがいいということではないですが、結果的に大人になったとき、子ども時代に活字に多く触れている人たちは、プラスに働くことが多くあるなど自分の経験の中で見てきました。

本と出会う機会、入口は、イベントだったり、リアルの場だったり、書籍に限らず、動画でもいいと感じます。

座長

ありがとうございます。

私たちも、時代と共にアップデートしていかなければいけないですね。

(2) さいたま市子ども読書活動推進計画（第五次）の策定について

事務局

国の第5次計画で示された基本方針は、「1 不読率の低減」、「2 多様な子どもたちの読書機会の確保」、「3 デジタル社会に対応した読書環境の整備」、「4 子どもの視点に立った読書活動の推進」の4つとなります。さいたま市としては、このうち、2、3、4について、どのように取組に盛り込むか検討し、第五次計画を策定したいと考えています。

本推進会議は、学識経験者1名、PTA関係者1名、市民読書活動関係者2名、保育所・幼稚園関係者1名、公募による市民2名、市職員からは、小学校校長ほか関係所管課より3名、合計11名で構成されております。委員の皆様には、専門的、あるいは、市民の代表という立場からご意見をいただければと思います。さいたま市子ども読書活動推進会議事務局は中央図書館資料サービス課が主に担当いたします。

次に、計画案策定についてですが、子ども未来局、学校教育部、生涯学習部の各担当で編成された、さいたま市子ども読書活動推進計画担当者会議及び、各拠点図書館児童担当者からなる児童・地域専門部会が担当いたします。さらに、第五次計画策定に必要な情報の収集や意見を聴取するため、オブザーバーとして、教育研究所、特別支援教育室、広聴課、小学校等とも連携を取って計画を詰めてまいります。また、素案完成時には、さいたま市図書館協議会からもご意見をいただきたいと考えております。この策定体制で素案をまとめ、第五次計画を作り上げてまいります。

続きまして、「さいたま市子ども読書活動推進計画（第五次）」の策定スケジュールについてご説明いたします。会議は今回の会議を含め3回を予定しております。今後、さいたま市子ども読書活動推進計画担当者会議にて、関係所管課に第五次計画に盛り込む内容の検討を依頼します。9月末頃までに、たたき台となる素案を作成し、第2回会議に報告させていただきます。第2回会議は、事前資料では8月～9月を予定しておりましたが、現在10月に開催を予定しております。第3回会議

は12月～1月頃に開催し、さらに委員の皆様からご意見をいただきまして、最終的によりよい計画にしていきたいと思います。1月末頃に教育長へ報告を行い、3月までに計画冊子の完成を目指します。

本日は、委員の皆様には、それぞれのお立場や経験から、特に国の基本方針の、「2 多様な子どもたちの読書機会の確保」、「3 デジタル社会に対応した読書環境の整備」、「4 子どもの視点に立った読書活動の推進」について、どのように計画に盛り込んでいったら良いか、あるいは、すでに皆様方が活動していて実践している事例など、経験談やご意見等をお聞かせいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

座長

ありがとうございました。2001年に子どもの読書活動の推進に関する法律ができ、それに基づいて各地方自治体が都道府県レベルと市区町村レベルにそれぞれの事情にあった計画に取り組んでいるわけですが、実は計画の策定は義務ではありません。そして、まだ策定していないところもあります。いわゆるガイドラインのようなものを「第五次」といって国が示しております。子どもの読書環境は変わってきているので、国からは法律に則ってこのようなガイドラインを出し、さいたま市はかなり早く取り組んでいると思います。4つの方針がありますが、デジタル社会に対応するということが盛り込まれました。多様性とか包括性ということでは、いろいろな立場の子どもがおり、例えばヤングケアラーなどの子どもの貧困も問題になっているので、多様な子どもたちの読書機会ということも盛り込まれたのだと思っております。こちらについて皆様から質問やご意見がありましたらお願いしたいと思います。

委員

不読率の低減は、さいたま市は考えなくていいということですか。

事務局

考えないというより、これまでずっと取り組んできたので、さいたま市としては今の状況を継続するということです。

座長

どちらかといえば、読書が好きな子を増やそうということですね。必ずしも国の方針に従わなければならないというものではないので、さいたま市としての判断になります。

事務局

新しい視点が盛り込まれたので、そこに重点を置いていきたいと思

っています。

委員 不読率の調査がどういう質問項目なのか気になったのですが。

座長 不読率の調査は、学校図書館協議会が行っている読書調査というもので、2024年に実施したものが第69回なのですが、6月に質問紙調査をして4年生以上の小学生と中高生に調査をします。全部で1万2千人に欠けるぐらいの生徒たちに質問紙調査をしています。例えば不読率であつたら、5月の1か月の間にあなたは本を何冊読みましたかという質問に対し、全く読んでいない人を不読者として不読率を算出しています。この結果が「学校図書館」という雑誌に載ったり、ホームページでも公開されたりすると、とたんに不読率が問題視され、話題に上がります。不読率が下がっているときもありますが、やはり依然として中高生はなかなか本を読まないという数字が出ています。

委員 この20年で、デジタル化などで相当環境が変わっていますが、質問項目は変わっていますか。

座長 基本項目は、その時々によって項目立てすると聞いています。ですので、例えば、電子書籍やスマホ・タブレットについての質問も今回は入っています。

委員 学校図書館協議会が実施している調査とベネッセと東大が共同で実施している調査の結果が違うのは、先生に提出するからよく見せようとする、みたいな何かはたらいっているのでしょうか。

座長 たぶん質問の枠組みが違います。ベネッセの方は、7年間の追跡調査ですが、「平日に本を読みますか」と聞いています。別のはかり方で、母体が違います。ベネッセと東大の調査は、今まであまり統計的に見えてこなかった、例えば幼稚園・保育園間の蔵書格差の大きさ等、今まで注目されていなかったことも取り込んでいて、データとしては非常に面白いものです。「読書」というと不読率を看板的に上げてくるところが多いです。数字的にわかりやすいということで、数字が下がれば良いし、上がれば大変といった感じです。

委員 でもそこで何が大変なのかと思いますけどね。

座長 なぜ高いといけないのかということですか。

委員 もっと自由でいいのではないかと考えていて、先ほど読み方について媒体手段にもありましたけれど、大人の目線での良し悪しを決めるものでもないと思っています。幼稚園でもそうですが、大人が思っている以上に子どもはしっかりしていて、自分の意思を持っているので、結局大人が正解と思っていることは別に正解じゃないという。だから私がいいと思っているから、子どもにもいいだろうというのは必ずしもそうではないというところを前提にしたほうがいいのではないかと思います。

座長 まさに今回の4番目がそうですよね。子どもの視点に立ったというところです。

委員 結局大人目線になっているところもありますよね。これは大人が考えている子どもの視点なので。いい本とかいい本ですが、いい本って大人が選ぶいい本になっていると思うので、それって本当にいい本なのかと疑問に思っています。

委員 今年の司書教諭研修会で、まさにその話が出ておりまして、去年の推進会議の中の取り組みで、児童館で子どもたちに本を選んでもらうという取り組みをされていて、私は本当に良いなと思いました。今学校図書館の中で起きていることの一つとして、読ませたい本と子どもたちが読みたい本が違うということがあって、今回の司書教諭の研修の中で、子どもたちが読みたい本を先生たちは知っていますか？というお話をしました。学校の委員会活動の中で、本が好きになる子、本を手にする子が一人でも増えるようにという観点から、図書委員会の子どもたちがアンケートを考えて作り、校内の子たちにアンケートを取るというのをやってみてはどうでしょう、というお話をしています。大人がこういう本が良いと提示するのも大事なことだと思いますが、同じくらい子どもたちが自分から本を選びに行ける環境を作っていかなければいけないなと感じています。

委員 これは前任校の話ですが、ちょうど教室の前に低い書棚があり、子どもたちに、どの本が欲しいのかとアンケートを取ったら、まさに先ほど

話題になった人気の本がたくさん挙がり、3年生と6年生が欲しい本というのは全然違いました。自分たちの身近に本を置き、その本は子どもたちが、例えば課題が早く終わったらそこに行って読み、持ち帰りはせず、次の人がすぐ読めるように戻すという環境を作ったことがあります。その本は非常に人気でした。このように、子どもの思いを反映させた選書や、それに触れる機会を作ったことがあります。

座長 こういう本が読みたいという子どもの声をどう拾っていくのかという
ことも大事なことです。

委員 その書棚の取り組みは、身近に本を置く環境を作ることになると思
います。推薦図書のパンフレットが学校から配られると思いますが、経
済的に買えないお子さんもいると思います。推薦図書は、例えば1クラ
ス1冊買ったりしないのですか。買った人だけ読んでいますか。

委員 学校規模にもよりますが、推薦図書になる本は、おそらく毎年、学校
図書館に2冊ずつ置いています。

委員 図書館には入っているということですね。

座長 買って読みなさいということではないですね。薦める限りは提供す
る、それが図書館の役割ですよ。多様な子どもたちというのも、何を
もって多様と考えるか難しい所ですよ。

委員 うちの子どもが小学校に入って疑問に思ったことがあります。一学
年7クラスある小学校に通っていますが、図書館は一つだけで、しかも
3階の一番奥にあります。だからとても遠く、わざわざ行くのかなと。
他の学校はどうですか。昇降口の横に作るとか、本に触れさせたいとい
う割に、立地が悪いのではないかと思います。

委員 私は都内の学校にも行くのですが、都内の私立小学校中学校は、一番
良い位置に図書室があります。日が当たり、どの子も行きやすい所にあ
ります。場所がない所は1・2年生だけの図書室があるケースもありま
す。さいたま市では、4階の一番奥の空き教室が図書室という学校があ
りますが、モデル校の場合は、いい場所にありますね。すごく広くて、
本もたくさんあるし。私が知りたいのは、モデル校だけが月刊誌も買え

ているのか、「たくさんのふしぎ」とか、子ども向け新聞とか。PTAからの寄贈で入れる学校もあるようです。月刊誌は全く買えていないという学校もあって、学校によって差があると感じるのは、やはりモデル校とお金の配分が違うのかなと思うのですが。

委員 所管課ではないため、分かる範囲で説明させていただくと、学校図書館で使う本や新聞を購入するお金は、学校規模によって違います。規模の大きい学校は配当予算が多く、新しい本や新聞をたくさん買うことができます、市内でも差があるかもしれません。

委員 子ども向け新聞も、複数買っている学校もあれば、全くなくて、1年間だけ、どこかから調達した学校もあり、保護者から来年からは新聞ないのですか、というクレームが来ることもあると聞いたことがあります。

委員 新聞の配置については、教育委員会からもお願いしていて、国からも複数紙配備するようにと話があるので、それは確実にお伝えをして努力をしていただいています。あと場所もおっしゃる通りで、いい場所にある図書室と、どうしても建て増しなどいろいろな校内事情もあって、ちょっとここは通いにくい、という図書室もあるのが事実だと思います。

委員 遠ければ遠いほど、移動時間がかかるので、委員会活動など、やることが多い高学年の児童が本を借りる機会が減りますよね。やはり、みんなが近い所、昇降口前が一番良いと思います。

座長 設備的なものは、現実的には難しい所かと思いますが、図書整備費は今でも学校に配分されていますか。

委員 図書整備費は、国から児童数に応じて配分されて、学校の裁量でその使い道を決めています。

座長 場所を移す訳にもなかなかいかないし、悩ましいですね。あと、モデル校という言い方も、私は不思議だと思います。そこをモデルにして、みんなでモデルに近づくように頑張るのではなくて、モデル校だからね、で終わっている、そのところですね。

- 委員 先ほど、廊下にミニブックがあるというお話がありましたが、ちょっとした工夫で、学年ごとの学年文庫がすごく充実している所もあって、すてきなと思います。
- 座長 学校図書館に関する指針が国から出ていますが、建物は旧態依然としてあるわけで、学校図書館はすべて昇降口の横に置くこと、と推進計画に盛り込む訳にはいかないですね。私は慶應幼稚舎に3年ほど勤めていましたが、慶應はもともと図書館を大事にされていて、子どもがすごくよく本を読みます。すごく立派な図書館が100年記念でできて、コンセプトとして、どこの教室からもなるべく近距離で、子どもたちが休み時間などにすぐ来られるように、本当に学校の真ん中にあります。子どもたちは授業の合間に来るので、アクセシビリティが大事ですし、開いていることも大事です。私が子どもの頃は図書館に行っても開いていないことが多かったですが、今は司書さんがいるからきちんと開いている。そのあたりは全然状況が違うと思います。子どもたちがより身近に本に触れることができるよう、各学校のアクセシビリティの向上に努めることが大切ですね。
- 委員 今、図書館は真ん中に置きなさいと、計画に盛り込むことはできないというお話でしたけど、何でできないのですか。
- 座長 物理的にそれを示すことが、実現可能かというところです。
- 委員 これは実現可能なことだけを書くのですか。議論のトップのレベルを自分たちで制限してしまうと、つまらないと思います。
- 事務局 そうですね。将来的にこうあるべきだっということですよ。
- 委員 そういうことを話し合う場ではないでしょうか。実現可能なことだけだったら、今と変わらないじゃないですか。
- 事務局 そういう話を出していただきたい場です。
- 委員 それなら、これだけ皆さんが良いと言っているのだから、盛り込んだら良いと思います。

座長 皆さん、この5年の中で、学校図書館のアクセシビリティを高めるとか、そういうことについて、ご意見いただければと思います。

委員 そうですね。そういう話って、学校現場に聞かないとわからないのかなと思います。ここにいらっしゃる中で学校関係の方に伺います。市内に小学校は100 ぐらいありましたか。

委員 104 校です。

委員 そのうちできる学校だって、1，2 校くらいあるのかなと思いますけどね。それでも前進じゃないですか。

座長 まずは例えば、その学校の中のどこに図書室があるかっていう把握からでしょうか。

事務局 そうですね。

座長 それがまだできていなければ、そこからでしょうか。

委員 ここの会議室で話していても、答えは出ないと思います。

委員 身近に感じられるような、そもそもそこに存在するということも、非常に大きな環境になりうるというところで、示唆に富む話だと思います。例えば図書室の場所や、廊下に面したところに書棚があること、学校でいうと各教室の中にも学級文庫があることなど。あとは、北浦和図書館の学校支援センターで本の物流を進めてくれて、ブックトラックで40 冊とかを、例えばあまんきみこさんの作品を集めて持ってきてくれて、国語であまんきみこさんの作品をやっているときには、あまんきみこさんの作品がいっぱい並んでいる。子どもがわくわくしながら本を読むとか。そういう様々な、本が身近に感じられる環境があるということでもいいのかなと。いきなり建物を変えるのは、少しダイナミックな話になってくるので、そこも1つの意見として、今例示したようなことも実現の可能性というところで、それぞれの学校が考えていくヒントにしてみたらいいと思います。

委員 学校支援センターの本は、どの学校も利用しているのですか？それとも、学校によっては全然使ってない？あまんきみこさんの本とか、要望があると思いますが、さいたま市内の全学校が使っているのか、それともすごく使う学校と使わない学校があるのであれば、もっとPRしてどの学校も満遍なく使っていただくようにしたいですね。

委員 ネットワーク便の話ですね。小さい学校については子どもの数が少なく、その学校で完結することもあります。もちろん全校が使えるように環境を整えています。ただ、その校内の事情とか、校内で大事にしたいことが優先されるので、学校司書や司書教諭の協力体制や、学校のシステムがうまくいっているところが多く活用してくださっているように感じます。あと、今年チャットで司書たちが繋がるという取り組みを始めました。近くの学校グループで組ませていただいているので、そのチャットの中で、こういう本を、例えば日光について調べているので、関連の本を27冊貸してください、うちこの時期空いていますとか、うちはいつから行くから大丈夫です、などとやり取りしています。ネットワーク便だけではなくて、いろいろなところで先生、司書たちが考慮しつつ、やってくださっているというのが現状です。

座長 今、学校の話がいろいろ出ていますし、そちらのほうを深掘りしてくださっても良いのですが、他にも、学校だけではないですね。

委員 そうですね。今、小学校が多く出てきたと思いますが、中高生の不読率が高いみたいな話があると、中高生ってどうなのでしょう。

座長 どちらかというと、高校は把握しにくいですね。

事務局 高校で対象にしているのは、さいたま市立の高校、中等教育学校含めると4校ありますが、計画の中では、その4校を対象として考えています。

座長 中高生たちが読まない、楽しく読書ができないのが問題といいながら、アプローチの方向がなかなか見えてこないところではありますよね。多くの高校は、県のレベルでやっているわけですね。

事務局 県立の高校についてはあまり把握できていませんが、市立高校です

と、図書館の司書と市立高校の司書との連携、連絡会議というのを定期的に行っているの、その中でお互いに連携してどんなことができるかなというのは、常々検討しています。

座長 埼玉県だとフェスティバルをやっていますよね。

委員 埼玉県の県立高校の司書は、県の採用で、正規職員がほとんどです。司書がものすごくやる気があって、商業高校では、就職活動のパンフレットをはじめ、ありとあらゆるものを資料として収集していますし、あとは、いろいろな子が読みそうな雑誌を全部そろえているようなところもあります。進学校ですと、子どもが読んでいる時間がないので、実習室に並べているところもあります。見学した限りは、学校ごとに、特色あるやり方でやっていると感じました。

事務局 市立高校も4校については、正規職員の司書が配置されていますので、それぞれ特色を持って活動をしています。

座長 市のレベルと県のレベル、私もなかなか判別しにくいですが、埼玉県は高校の学校司書が頑張っていて、浦和第一女子高校の司書さんは、みんな連携して、学校司書の仕事をアピールしたり、あとは推し本といって、県下の司書の皆さんが毎年、生徒たちの様子を見ながら自分たちが薦めたい10冊の本を紹介したりしているのですが、いつも面白いなと思っています。しかし、どうしても高校になると、市のレベルと県のレベルがどうシームレスに繋がっていくのかとか、そのあたりがなかなか見えなかったりします。中学校もよくわからないのですが、今中高生の読書のアプローチをどうするかと言ったときに、学校って1つの大きな入口にはなると思うので。例えばこのビブリオバトルは、中学校でもやっていますか？

事務局 そうですね。主に中学校対象として、学校での開催を推進しています。

座長 中学生にアプローチする手段として良いですね。

事務局 中央図書館では、毎年1回、ビブリオバトル大会を開催しています。第四次計画期間の中では、大人からではなく、子ども同士が、おすすめの本を紹介し合う、そういう取り組みが有効ではないかということで、

ビブリオバトルを各学校でも実施してもらえよう、推進してきました。学校で取り組みやすいように、図書館で学校向け実践ハンドブックを作り、各中学校に配布しています。それを読みながら、別にある様式集をそのまま使って、ビブリオバトルのイベントが、すぐに開催できるようなものを目的として作成しました。学校での取り組みが少しずつ増えてきたかなというところです。あとは中高生向きですと、POPバトルも毎年開催しております。これは高校4校の生徒に、POPを作成してもらい、そのPOPと本を、各高校と図書館で配置して、来館した人に、POPを読んでどの本が読みたくなったかというのを投票してもらいます。来館しなくても、ホームページ上で投票することもできます。最終的な投票数を集計して、どの本がチャンプ本か決めるというイベントです。

委員 このビブリオバトルを拝見すると、おもしろそうだなと思いましたが、結局、もともと本好きな子がやるのかなという気がします。1冊も読んでいない子は薦める本がないじゃないですか。

事務局 そうですね。全く読まずにバトラー（発表者）として参加するということはないですね。

委員 今回ただ本を読む子を増やすとなると、0だった子を1にすることと考えると、これは面白いけれど、どうなのでしょう。

事務局 ビブリオバトルについては、バトラーは確かに本を読む子が主に参加すると思いますが、観戦者はそれを聞いてどの本を読みたいと思ったか、投票する場面がありますので、あんまり本が好きじゃないけれど、友達がやるなら見に行ってみようかなとか、ご家族の方とか、実際に出場する子だけでなく、観戦者として不特定多数の人が、本につながるという効果が期待できます。

座長 別にバトルしなくてもいいだろうとなりますが、ただ発表するだけでなく、質問タイムがありみんなで投票して決めるという形式が、イベント性が高く、入口を広げています。おっしゃったように、どうしても本が好きな子、本に興味のある子たちが主たる対象になってしまうので、そうでない子をどうやって巻き込んでいくかというのは、また一つ工夫が必要になってくると思います。

委員

子どもに本が必要とは思いながら、正直僕自身はあまり大人になって本読んでないですよ。別に必要じゃないし、なんて思って。ですけど、何がきっかけで読むかなと考えると、自分が尊敬している、この人すごいなと思う人がこの本読んでいるよというときには読みたくなるなど。例えば小学生だったら、Y o u T u b e r が何読んでこうなったかとか、そういったのがきっかけになるのかなと思いました。よくわからない人から薦められるより、こうなりたい、すごいなという人からの薦めなら読んでみようかと思う。そういったことは中高生でも効果があるのではないかと思います。

座長

事典を作るときに、子どもを取り囲む、読書環境を考えていたのですが、やはりコロナ後に出てきた、バーチャルな環境がありますよね。おっしゃったY o u T u b e r が薦める本とか、子どもたちが、もうこちらでも言ったことですけど、触れる入口は実はいろいろあって、私たちより長けているSNSとかY o u T u b eとか。自由の森学園の先生に話を聞くと、N o Y o u T u b e N o ハイスクールライフと子どもたちが言っている。自分の興味の範囲でどんどんつついていく、そこに何か読書の仕掛けがあってもいいよねとか。そこから、今おっしゃるように、自分が尊敬している、大好きな人がいて、その人がこの本を面白かったというから読んでみようかともなるので、私たちもそのバーチャルな空間からのアプローチみたいなものも、現実問題としては本当に考えていかなきゃいけない。でも図書館も後発ではありますが、割とインスタであるとか、SNS経由の発信もしているところではあるけれど、なかなか市民に見てもらえないという場合もあります。

事務局

図書館を使っている方が見るのかなというところはありますね。興味のない人、来ない人に対してのアプローチの方法というのが、一番の課題になるのかなと思っています。好きにさせるための仕掛けづくりという点では、幼少期がキーポイントになるのかなと思っています。

座長

幼少期がポイントになるとすれば、幼稚園の役割が大きいですね。子どもが家庭から出て最初に他者に触れ、そこで本に触れる可能性がある場所なので、その充実度で、大分違ってきますよね。

委員

そうですね。うちでも大体園児 260 名ぐらいですね。3クラスずつ

合計9クラスあって、それぞれ大体20から30ぐらいの絵本があります。それだけで、約300冊あり、かつ、図書室というかそういう部屋に2000冊以上用意してあります。年長さんになると月1回ぐらい借りる機会を設けています。あとは読み聞かせは日々行っている状況でして、触れる機会、例えばアクセスできる環境というのは基本的には用意ができていのかと思っています。ただやはり好きとなると、好きって強制するものではないと思うので、そこはあくまでも環境を提供するということにとどまるというか、それ以上は少し違うかなと思っています。

座長 あとアプローチするための仲立ちになる人はどうですか。

委員 先生が基本的には読み聞かせをするときの主体になっています。加えて、地域の読み聞かせボランティアの団体がいらっしゃるので、そういった方に入っていただいたりとか、あとは保護者、うちは母の会と表現しているのですが、そちらにも図書ボランティアになっていただいて保護者の方にも参加していただき、読み聞かせだったりとか、図書の貸し出しを担っていただくことも行っています。あくまで園での子供たちの生活の一部として、本にアクセスできる環境は考えていきたいなと思っています。

座長 それは委員のいらっしゃる園の話ですよね。

委員 そうですね。ただ幼稚園全体はわからない。しらさぎ幼稚園などは、特に力を入れてらっしゃると思います。さいたま市内の幼稚園は100園と言いましたが、全部私立ですね。市立、いわゆる公立の幼稚園が1園もないので、公立として、というのは仕組みとしてないですね。結構私学の独自性みたいなのところがあるので。

座長 そういところのネットワークというのはありますか。

事務局 情報提供、情報収集などは、幼稚園協会を通して、チラシを配ったりとか、冊子を届けたりというルートはあります。

委員 いただいた情報を広げるというのは幼稚園協会として役に立っているが、実態調査みたいな形で何かというものは特にないということでは

すよね。

事務局 市の取り組みとして読書キャンペーンを行っており、幼稚園協会に依頼し、各園に情報提供していただき、ご協力いただいた園もあります。事例を提供いただいて、実際に表彰された幼稚園もあります。

委員 読み聞かせの仕方についても、幼稚園、保育園教員向けに、さいたま市が研修の機会を設けています。公立の保育園の先生も参加していると思います。市主催の研修に、我々私立の幼稚園も参加しているのでありがたいなと思います。

委員 紙芝居の講座に保育園の先生たちが参加して、独学でやっていたので、すごく勉強になったというふうに保育士さんが言っていましたね。

座長 つなぐ人をどうやってトレーニングするかという、いわゆる子どもに直接アプローチも大切だけど、環境とつなぐ人に対するアプローチが、親であるとか、幼稚園だったらそういうところのアプローチを充実させていくのも大切ですね。

委員 その研修は、浦和コミュニティセンターや、子ども家庭総合センター「あいばれっと」でやっています。

委員 今ご紹介いただいたのは、おそらくこども未来局の幼児政策課が主催している研修で、保育士、幼稚園教諭等を対象にした資質向上研修の中の1つとして読み聞かせの研修を行っています。

座長 どこがやってもいいんですよね。お互い情報共有する。それがやはり読書活動の推進計画はみんなでやりましょうということだと思います。

委員 小学校の先生とかにもそういう機会があるといいのでは。幼稚園教育に関しては、仲介となる読み聞かせする人に対する研修がありますが、小学校の先生にも、そういう機会があってもいいのかなと思います。

座長 小学校だと、担任の先生の影響は大きいですね。

委員 教科担任制が始まって、結構小学校が様変わりしているようです。

- 座長 そうなのですね。難しいですね。
- 委員 教科担任制は何年生からですか。
- 委員 今のところ5・6年生で、いずれ、3年生ぐらいからに拡大していこう、という動きになっています。
- 委員 実は埼玉新聞に記事が出ていて、まさにその中学年教科担任制というのが、令和9年度に実施となっていますが、低学年は変わらず、生活全般は担任の先生が見ることがベースとなります。
- 委員 ボランティアで読み聞かせをやっていて感じますが、小学校の先生方、子どもと一緒に楽しんでもくれる先生もいますが、自分の仕事をして聞いている先生もいます。そうするとすごく子どもに影響しますね。私たちが本を読んでいるときに、先生も一緒になって喜んでくれたり、質問すると一緒になって答えてくれたりするのとはとてもいい雰囲気です。子どもも満足して終わります。でも先生の中には、採点をしている先生や全然聞いていない先生、どこか行ってしまう先生もいます。そうするとやはり、終わった後の満足感が全然違います。だから、先生もともに楽しんでもらいたい、これをぜひやっていただきたいなと思います。
- 座長 自分の作業時間が増えたみたいにいる先生も、私も経験としてあります。つなぐ人が楽しいと思わなければ、つながれる方は楽しいと思わないわけで。だから子どもを取り巻く大人の理解をもっと持つことも大切だと思います。
- 国で示された子どもの読書機会の確保ですとか、デジタル社会の読書環境の整備とか、子どもの視点がどういう視点かというのは、読書活動の推進についてということで、したがって今までの意見もかなり即した話があると思うのですが、限られた時間ですが、皆様一言くらいずつお話いただけると嬉しいです。
- 委員 この多様な子どもたちとは、病院の図書館というか病児保育とかも含まれますか。

- 事務局 想定できるものは何でも含めたいと思っています。
- 委員 さいたま市は市立の病院には何かありますか。
- 事務局 今のところ特に繋がりはないです。
- 委員 他の市では市の病院の小児科に子ども文庫があったりしているので。消毒してまた返すのも大変ですが、そういう病児の支援もできたらいいなと思いますし、あとは、学校の保健室から出られない子も、学校にいますので、そういう子には保健室に小さい文庫があるだけで、全然違うと思います。どこにでもミニ文庫があっていいかなと思います。私の息子が理科の教員ですが、中学の理科室に、自分の理科学庫みたいなものを作っているようです。単元に合わせたものだけでなく、発展した内容も自前の本ですが置いているので、どんどん子どもがその場で借りて読んでいます。図書室へ行かなくても、好きな子はここで読んでいて。その先生がセレクトした専門書みたいな感じでもあるので、いろいろな場所で大きな図書館をつくれないうなら、ミニ文庫みたいな、どこでも子どもがアクセスできるような本があってもいいかなと思います。それなら実現が近いのではと思います。
- 委員 今日皆さんの意見を聞いて、すごくアイデアが湧き、PTAでできることもたくさんあるなと思ったので、色々考えてみたいと思います。
- 委員 何かできそうですか。
- 委員 こういうイベントを増やしたり、告知したり。PTA協議会を通すと結構できると思います。
- 座長 アイデアをたくさんお持ち帰りになると。他の皆さんはどうですか。
- 委員 さきほど話が出た、対象をどこにするかというところと言うと、高校生は対象外でいいのではと思っています。結局好きという概念を目標にするのであれば、もはや高校生にこちらからどうこういう年齢でないでしようと思うので。
- 座長 読書推進は、中学生ぐらいまでというご意見でしょうか。

委員 幼児・小学生は例えば買いたい本がまだ買えないという経済的側面もありますが、高校生はアルバイトでお金をもらって好きなものを買える状況であれば、そこをどうこうすることはないかなと思います。
（高校生を）対象にしても良いですが、議論としてはやはり幼児・小学生になりますね。

座長 ほかの皆さんはどうお考えですか。

委員 高校生も強制はいけませんが、多感なときですし、やはり高校生にもこういうのがあるというふうに薦めるのは必要だと思います。

委員 学校図書館では、高校生に読書を薦めています。高校図書館のある意味として、ただ楽しむ読書についてもそうですが、最近の大学入試において、例えば理数系の問題でも、そもそも国語力がないと解けない問題が出る傾向になっていると聞きました。それを受けてやはり先生は、もっと本を高校生にも読んでもらいたいとおっしゃっていました。

委員 高校の図書館が意味がないと言っているのではなく、好きな子が行く分にはよくて、推進という面ではどうか、ということです。

座長 上から推進することではないのではないかとということです。

（３）子ども読書活動推進について（意見交換）

座長 時間が限られていますので、一言皆様に話していただきたいと思います。感想でも構いません。

委員 感想になりますが、図書館を学校の真ん中にみたいな話が途中にあったと思いますが、そういう物理的に施設を真ん中に置くということ以外にも、好きな本を紹介し合ったりとか、先生のおすすめの本を聞いたりとかして、何か気持ちの面でも身近に感じられたら、本を好きになってもらえるかなと思います。

委員 さきほどの図書館を真ん中というのは、いろいろな兼ね合いがあるので、すぐにできると思えないところはありますが、新しくできる学

校に関しては、やはり図書館が図書館としてあるというだけではなく、学校の所々に本のスペースがあるという形で設計されていると良いです。子どもの身近なところに本があって、いつでも手に取れたりするような環境作りと考えると、各学校で取り組みができるのではないかと思います。あとやはり多様な子どもたちの読書機会の確保と、デジタル社会に対応したというところは検討の余地があると思っています。デジイー図書とか、点字図書の貸出ということに関して、教育委員会に問い合わせが年間何回かあります。高いものなので、学校図書館で用意することが非常に難しいので、こういうあたりも公共図書館と貸出に關してうまく連携できたらいいと思います。あとデジタルをうまく使うことで、学校でも使いやすくていいと思うので、そのあたりが盛り込めたらいいなと思っていますところ。

委員

本日はありがとうございました。小学校の生活科の時間に、子どもたちが図書館見学に行くことがあります。そうすると、図書館の方々の熱量に触れて、おうちへ帰った後、図書館へ行きたいとおうちの人に頼んで、そこで貸出カードを作って、図書館に通うようなエピソードを何度も聞いたことがあります。具体的な本に触れながらみたいな話題が多かったと思いますが、そういう教育活動の中に、何かのきっかけがあるということも、どこかで触れられたらいいかなと思います。

委員

どうもありがとうございました。私も感想になりますが、国の基本方針の3番、デジタル社会に対応した読書環境の整備について、非常に関心の強いところです。出版社では、電子化を進める、あとはオーディオブックをどうしていくか、或いは大学図書館へのレーベルごとの貸出について、年間の契約を取っているようなところです。自分の子どもを見ていると、タブレットなどの利用がとても増えているので、今後どうなっていくのだろうかと思になります。

売れている本の話とか、出版動向の話でしたら多少調査できるので、何かご質問とかご意見があれば伺いたいと思います。

座長

読者調査や出版状況調査みたいなことでしょうか。

委員

出版状況のデータとか、調べ方は多少あるので。さきほどのSNSの話もそうですが、T i k T o k で本を紹介する書評家に出版社も頼り切りです。本を売る話と絡めてなら少し何か調べたりとかはできるか

もしれません。

座長

本を売る手法を、本を読んでもらう手法に読み替えられると良いですね、図書館は売るわけではないですがとても有効だと思います。
他に何かありますか。

委員

こういう推進計画、特にある一定の予算を投じた計画は、必ず目標値を設定して進捗を報告し、達成率も適宜報告してということが求められる側面について理解できますが、私も今日皆さんの話を聞いて、だとしたら、例えば受験や部活などで多忙な高校生は推進計画の対象から外すなど、声高らかに言う必要はなくとも「注力するフォーカス対象」はもう少し手前の「好き」を作る時代のフェーズに絞るなどしてもいいのかなと思いました。そうすることで、さきほど司書の方がおっしゃいましたが、「いつかまた戻ってくる」のではないかと思います。

それからもう1つ、共働き家庭がすごく多くて、学校の後、学童保育にいる時間がすごく長いお子さんも大勢います。その中でのプログラムや、読書の時間なども含めて、先生たちも何をすればいいか、保護者とディスカッションして決めたりもするわけです。私も関わらせていただいたことがありますが、この場には司書の先生や学校の先生もいるので、何かアイデアが出てきたらいいなと思って聞いておりました。

座長

年齢層についての話ですが、先ほどの委員のお話で、高校3年生の子たちが受験が終わって、またすごくたくさん本を読むというのは、やはり、それ以前に読書の働きかけをしたことによって、彼らが高校生のときにそれが実態として見えてくるということですよ。だからその戻ってくるということは、読書の推進ではなくて読書の効果といえますよね、読書は生涯にわたる行為なので。本を読まないとおっしゃっていた方もおられましたが、やはり子ども時代の読書は途切れるわけではないので、子ども時代を18歳までに限定したときに、彼らが例えば、高校のときに、実は読まないけれど、また読むようになったというのは、すごく興味深く聞かせていただきました。そういう情報もぜひ、読書に関連してどういうことがあり得るのかということを考える意味でも、大切な材料になると思うので、またたくさん意見を伺えればいいと思いました。今日は本当にいろいろなご意見とか、いろいろな立場での皆さんの本音みたいなのところも聞けて、私も気づかされることがあってよかったと思っています。ここでもう時間ですので、会議の進行を事務

局にお返ししたいと思います。

6 閉会

事務局 ありがとうございました。本日いろいろなお立場の方にお集まりいただき、たくさん刺激になるような話が聞けたことが一番の収穫だと思います。この気づきになったヒントなどをまた素案という形に落とし込んで、第2回会議のときには、皆様にお示しできるよう、準備を進めて参りたいと思います。本日は誠にありがとうございました。最後に、事務局から事務連絡申し上げます。

事務局 次回の協議会は10月に予定しております。日程が決まりましたら、改めてご連絡いたします。どうぞよろしくお願いいたします。